

## 東漸寺時代

### 華嚴天台

東漸寺大谷大康老師（教導職の階次十■級のなかの大講義であった）は、この道心に燃え素養ある弟子を得て非常に喜び懇切に仏書を講授した。入寺そうそう仏学普通の順を破つて、仏学中、最も難解とされた最高法門である華嚴けごんの時々無碍じじむげ法界ほっかいのあらましを授け、ついで天台四教義を教え、つづいて天台三大部のこれは大部なればその要領を授けた。その間宗乗につきてもねんごろな指導があつた。

普通の心で経験する自然界精神界を超越した、修行して智慧の眼を開き、そのさとの鏡にうつる所の法界の種々のありさまを、学問として理解する出家最初の驚異の眼は光つた。

### 念願証入

しかし学問としてならばどこまでしてもそれはうわさに過ぎぬ。うわさはどんなにわかつてもおぼろである。実地にその真実のすがたを見届けなければ、出家修行する甲斐がない。うわさでない実地を得たいと強く念願した。

教授さるる学問はみなただの学問ではない。修行の熱を喚起する導火線たるに過ぎなかつた。かくて一方に学解がすすむとともに、一方に称名念仏に精進し、修行がすすむとともに菩提を

求むる意志は堅く、如来を仰ぐ信念はますます熱いものであった。

### 行学精勵・且炊且読

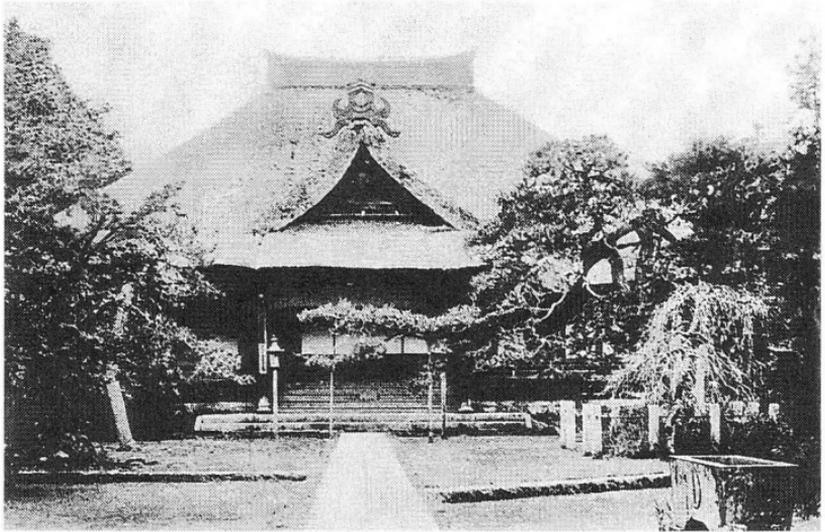
朝はいつも■時にはもう本堂で念仏、夜は深更まで念仏読書、庫裡の二階の北向きの室で、冬などは窓の前の竹藪をサラつかして吹きこむ寒風、穴だらけの障子から遠慮なく骨をさす中に、小さな豆ランプの光で書見した。なお睡くなれば線香を腕の上にたいて睡気を払った。

広い境内本堂庫裡の掃除、風呂たき、薪割り、豆腐買いなどの走り使い、台所での炊事など、寺役の外に随分忙しかった。

寺制として交り番で炊事をするに、竈の前で火を燃しながら、読書に夢中になって、ご飯をこげつかせることが度々ある。老師は側の弟子に「今朝のご飯は誰が炊いたか」ときかれ、「弁栄さんです」と答えると、「今後は弁栄は読書の番に定めておいたがよかろう、その方がこげたご飯をたべずにお互いトクだろう」といわれた。

### 途上読書

お伴をして行く時も、仏書の一二を鼠色の風呂敷に包んで持ってゆき、老師が用事をたす間、石の上などに腰かけて読んでいた。使いに出され道々書物を読むのに夢中になり、行き過ぎてあともどりすることも多かった。ある時はまったく路をまち



がえてしまった。気づいたときそのまま進んでゆき、「どこかに出るだろう、しばらく読書ができるだけましだ」と思って、その路をひきかえそうともしなかった。

寺 当時鷺野谷にヤソ会堂がありて牧師がよく  
漸 東漸寺に質問にきた。老師にかわってこれに  
東 応対し、耶穌教の要理をつきこんで反問し、  
急所をつくので牧師はこまり、ついにこなく  
なったことなどもあったほど、当時からヤソ  
教の方面にも、いささか研究の指をそめてい  
た。

### 熟睡三時

かくて寺の仕事と読書とに  
せわしきなかを、朝夕長時の  
勤行、終日不断の称名、寺内の誰が寝るとき

もまだ起きて読書しており、誰が起きるときもすでに本堂で念仏のかねを響かしていた。老師さえ「弁栄はねないのだろう」といつていた。でも三時間位は寝た。横になるとすぐ熟睡、おそらく身体をもつてゆかれてもしらぬくらい深い眠りで夢もみない。(後年よく「夢などみるのは贅沢だ」といわれたものである。)

### 不語世事

世間話などまったくできず、挨拶もロクにできない。随行していった檀家先で、老師はよく「この弁栄は馬鹿坊主であります、馬鹿坊主ではありませんが、しかしよく仏の道はまもります」といわれた。

### 捨家棄欲

医王寺に用たしにやられて、生れた村を始めて訪れたのは一ヶ年目ぐらいのこと、きで、それでもよければ父母にあえる生家にはたちよらなかつた。用事があるときは父上が東漸寺まで出かけていった。ある時、法衣の余りみすばらしきを見かねて、父上が金五円をあたえて、法衣を新調させようとするところもより本を買ってもらいます」といつて書物をもとめた。

東漸寺の経蔵には一切経が蔵されているのでたいへん便利をえた。眼は知にかがやき眉は徳に垂るる老師の親切な薫陶のもとに、読書と称名ならべ精進した明治十三年も暮れた。

寺内年長の大衆がかえつて弟分となつてうやまつた。この世に稀なすすみに慈愛にみちた老の眼を細めた老師は、明治十二年十一月以来の成績にかんがみ、もはや我が膝下に止むべきでないと思ひ、すみやかに帝都一流学者の門をたたいてこの法器を磨かせんとて、明治十一年正月から上京させることになつた。

夜来の吹雪に、野も里も一面の銀世界となつた小金村は、夜あけ前の薄闇の底に眠つてゐる。村はづれの古い木立ちの梢を抜いて高いいらかに、幾百年の風雨を凌いだ葵あひのご紋が燦然さんぜんとして、將軍家外護げごだんりん檀林の錆びをのこしてゐる東漸寺の本堂から、キーンと底冷のする鉦の早打ちの遠音がいつものごとく暁近い雪空に霰のごとく響いてゐる。

東京遊学の途にのぼる出立の朝である。

年来精進の念仏三昧に開ける心境の、人知れぬ不思議にみづから驚き、日夜に読み考える仏法の大海の、茫々ぼうぼうはてもなき彼方に輝く極光にあがれて、さらに研学修行に旅立ちするこのあした、年来仕え奉つた本尊前にぬかづいて、称名にこむる至心祈願の誠は一しおふかかつた。

東漸寺は千葉県東葛飾郡小金町にあり。仏法山、一乗院と号す。総境内五千八百余坪あり、総門、中門、鐘楼、円通閣、正定院等建並び、宏荘なる楼門には仏法山の扁額厳めしく、本堂屋根には金色葵の

紋章三個燦然たり。樹木鬱蒼として各宗通して国内屈指の名刹たり。開山は経誉上人。文明十三年の創建、初め根本内村にあり、小金城主高城氏の香華院たり。中興行誉上人これを現地に移し、徳川將軍家の帰依をうけて檀林に列し朱印三十五石を賜う。

大谷大康師の膝下より後の浅草誓願寺住石井師、横浜光明寺住宮下師等の護法家を始め、多教輩出す。皆前後同学なり。

老師の法号は安蓮社静誉恭阿又夢大康大和尚。東漸寺第五十世なり。

## 東京遊学

### 宗乘余乘・通学独学

明治十四年（一八八一）（二十三歳）正月歩行で東京にでて、二月より増上寺で伝通院主大谷了胤老師の往生論註、唯識論述記、俱舍

論その他の講席に列し、また一方四月から十一月まで当時教界に令名高き浅草日輪寺（時宗）

卍山実弁老師の原人論、起信論等の講義を参聴。次第に首楞嚴經等をきわめ、十五年■月後に

は駒込吉祥寺学林で卍山老師の華嚴五教章を聴講した。その他にも聴講しかつ多くは独りで経

論を読みよく咀嚼した。また真言宗与樂寺で眼を密教にさらした。師にもつきはしたものの多

くは自己の所解と師の説を照し比べ、人の説ではなんだか危なつかしく、みづから熟考したのちでなければ鶴呑にはされなかつた。仏法は学解にあらず、三昧実証にありというのが常の方針であつた。

当時の増上寺法主は徳望古今に秀でたる行誠和上で、疾にこの青年沙弥の比なき法器に嘱望し、爾来ずつと推称しておかなかつた。

### 真如問答

芝山内学頭寮に止宿して宗乗聴講中、同寮で決疑鈔を聴講していた海沼教随法尼（後に信州松代大信寺住となりし徳者）が真如実相の趣がわかりかねて当惑し、  
同学の因縁でお尋ねしたところ、法尼がその当時より始つて一生尊崇師事した上人は

「真如とはおのが心のガラス窓見ゆるものかは見えぬものかは」

と歌で示され、さらに進んで真如とは阿弥陀仏の実体なることを教えられ、法尼はこの指南により頓に信念に力を増した。

駒込吉祥寺学林では大鹿愍成師、宮沢説音師（両師とも浄土宗。後に京都本山法主大僧正となる。編者に向つては、両師とも、この当時に上人に敬服していたという話はしなかつた）もともに同学であつた。大鹿師は法相相對の立場に立つてに対して、こちらは華嚴絶対の立場から批議談論することもあ

つたにあつたが、たいてい隅の方で黙想ばかりしているので、宮沢師等一般からはのけものにされていた。

止宿は初め芝増上寺の学頭寮、それから浅草日輪寺（時宗）、次いで田端の東覚寺（真言宗）に移り通学された。二円の学費をもらつて一円で自炊し一円を学事に用いられた。

芝学頭寮止宿中は、毎朝四時より六時までと毎晩六時より九時まできまつて  
**称名精進**

念仏勤行、正午より浅草日輪寺通学。原人論聴講に先だつてみづから書中の理を図に作つた。世間話など一度もした事なく、いつも凝つと思ひ入つた風情にて、称名だけは常に断えなかつた。一日三合ぐらいのお粥に大根漬ぐらいが常食で、そのたくあんを机のしたに小刀とともに置き、しきりに時間を惜んで手で少しづつわりて召上つた。勿論寒中も火鉢などはない。通学して聴講するよりも黙座して想を法門にこらす方が主で、ひとり眼を仏書にさらしつとも心を三昧に凝して念仏する方が主であつた。切磋琢磨する金剛の一心にひたすら如来大悲の加祐を仰ぎ修行の成就を念願された。

（聴講した書名は判明せしもののみをあぐ。他は名目不明のためあげず）